

紀要

■設立50周年記念号

- 鳥浜貝塚におけるニホンジカの利用…………… 佐藤 巧庸 (1)
- 土偶の意味論に関する理論的基盤の整理と試論…………… 瀬口 眞司 (13)
- 湖北・湖東地域の前期古墳の葺石…………… 宮村 誠二 (23)
- 横穴式石室の空間設計の検討
—志賀古墳群における平面プランと副葬土器…………… 堀 真人 (28)
- 木村石塚古墳出土埴輪について…………… 辻川 哲朗 (40)
- 近江八幡市大中の湖南遺跡の再検討
—石敷き遺構 第1遺構の構造について— …… 田中 咲子 (57)
- 小型海獣葡萄鏡について…………… 福井 知樹 (61)
- 墨書土器にみる古代の近江 —その2—…………… 濱 修 (64)
- 比良山系の山寺に築かれた石垣と回峰ネットワーク… 小林 裕季 (79)
- 『阿刀氏家譜系脈 御由緒二関ハル古記調査書類』
現代語訳・解題(2)…………… 阿刀 弘史 (90)
- 将棋史研究ノート 11—改めて将棋について考える—…………… 三宅 弘 (98)
- 「清瀧寺徳源院」絵図の示すもの…………… 中川 治美 (107)
- マメ類の利用についての研究ノート(2)…………… 小竹 志織 (119)
- 木製品の保存処理について —課題と実際—…………… 中村 智孝 (122)

34

横穴式石室の空間設計の検討—志賀古墳群における平面プランと副葬土器

堀 真 人

1. はじめに

近江において横穴式石室は、おおむね5世紀末に導入され、導入された石室は、様々な系譜があることが知られている。その系譜とは「畿内型石室」といわれる石室、「ドーム状石室」「穹隆頂持ち送り石室」といわれる石室、「階段式石室」といわれる石室である（田中 1993・辻川ほか 2007）。

この中で「ドーム状石室」「穹隆頂持ち送り石室」と呼ばれる石室は、①玄室の平面プランが方形や横長方形、②奥壁、側壁の持ち送りが急で天井石を1～2石で構築する、③ミニチュアの甗、甕、移動式カマドを基本とした炊飯具セットが出土するなど共通した特徴が目立つ一群である。分布は、大津市の比叡山東麓を中心とした湖西南部に集中している（図1）。

水野正好氏はこれらの特徴を有する古墳を、文献資料にみられる当該地域居住氏族と関連付けることにより、渡来人の墓であると結論付けた（水野 1969）。この論文は、古墳時代の渡来人研究の先駆けとしてあまりに有名である。その後、花田勝広氏が上記の特徴を有した古墳が集中する比叡山東麓の古墳群を「志賀古墳群」と呼称することを提唱した。そして特有の石室、ミニチュア炊飯具・釵子の副葬等の共通性と、周辺地域においてオンドルや大壁建物を採用する集落が確認されていることなどから、改めて渡来系氏族の存在を明らかにした（花田 1993）。

以降、調査の積み重ねにより、当該地域の横穴式石室を主体部とした古墳の築造は、TK47 型式～MT15 型式段階に始まり、その後 TK217 型式段階まで継続していたことがわかっていく。

2. 本論における目的と方法

(1) 目的

筆者は、志賀古墳群に葬送儀礼の共通性（遺骸の配置・副葬土器の内容・配置）が認められる一群が存在することを明らかにした。そして、葬送儀礼を共有する集団＝渡来人と想定し（堀 2009・2012）、そのうえで、副葬土器の内容・配置において、古墳群内に複数の系統があることを確認した（堀 2020）。

本論では、石室の平面プランの検討を中心に据え、副葬土器(1)の内容・配置との関連を整理する。そして志賀古墳群において、平面プランと葬送儀礼の関係を明らかにすることを目的とする。

(2) 方法

横穴式石室における空間は、遺体を安置する玄室、入り

口からそれに至る通路である羨道からなる。玄室・羨道は、横断面である平面プランと縦断面や石材の使用法などの立面から構成されている。志賀古墳群では、平面プランの検討等から、古墳群内に広範な石室の築造規定の存在（辻川 2006・森 2007）が明らかにされている。また、立面の観点から、石室の壁面構造の分析を行い、「畿内型石室」との関係性についても明らかにされている（藤村 2007・2010）。

横穴式石室の空間の利用方法を明らかにするためには、平面プランと立面の構成の3次元的な検討が必要となる。しかし、調査された古墳は天井石まで残っている石室が少ないという資料的な制約、土器・遺骸の配置は立面プランより平面プランに制約されていると考える立場から、本論では平面プランを重視して検討する。中でも、玄室の平面プランを中心に扱う。

そこで、既往の研究成果から志賀古墳群内の平面プランの位置付けを整理し、その規格性の有無を確認する。そのうえで、副葬土器との関連に言及したい。

(3) 時期

時期は 出土している土器から以下のように設定する（田辺 1981・1996）。ただし、出土している遺物から時期が確定できない場合は、石室の編年を対応させて使用する（藤村 2010）。

I 期 TK47 型式～MT15 型式段階

II 期 MT15 型式段階

III 期 TK10 型式段階

IV 期 TK43 型式段階

V 期 TK209 型式段階

VI 期 TK217 型式段階～

3. 平面プランの検討の課題

(1) 志賀古墳群における平面プラン

玄室の平面プラン（以下平面プラン）を構成する要素は、長さ（奥行）、幅、袖の有無とその幅である。

平面プランは、古墳群(2)の特徴として水野氏が「方形」が目立つことを指摘したことが最初である。平面プランは、玄室の長さ/幅の数値を使って明確化をしておく（堀 2020）。分類の基準数値範囲を「方形」＝0.8～1.19、「横長形」＝～0.79、「長方形」＝1.2～とした結果、実測図が公表されている石室では、「方形」が約 19%、「横長形」が約 2%、「長方形」が約 79%である。「長方形」プランが主体で、「方形」「横長形」プランは、むしろ客体である。約 2 割の石室が「方形」「横長形」であることが、志賀古墳群の

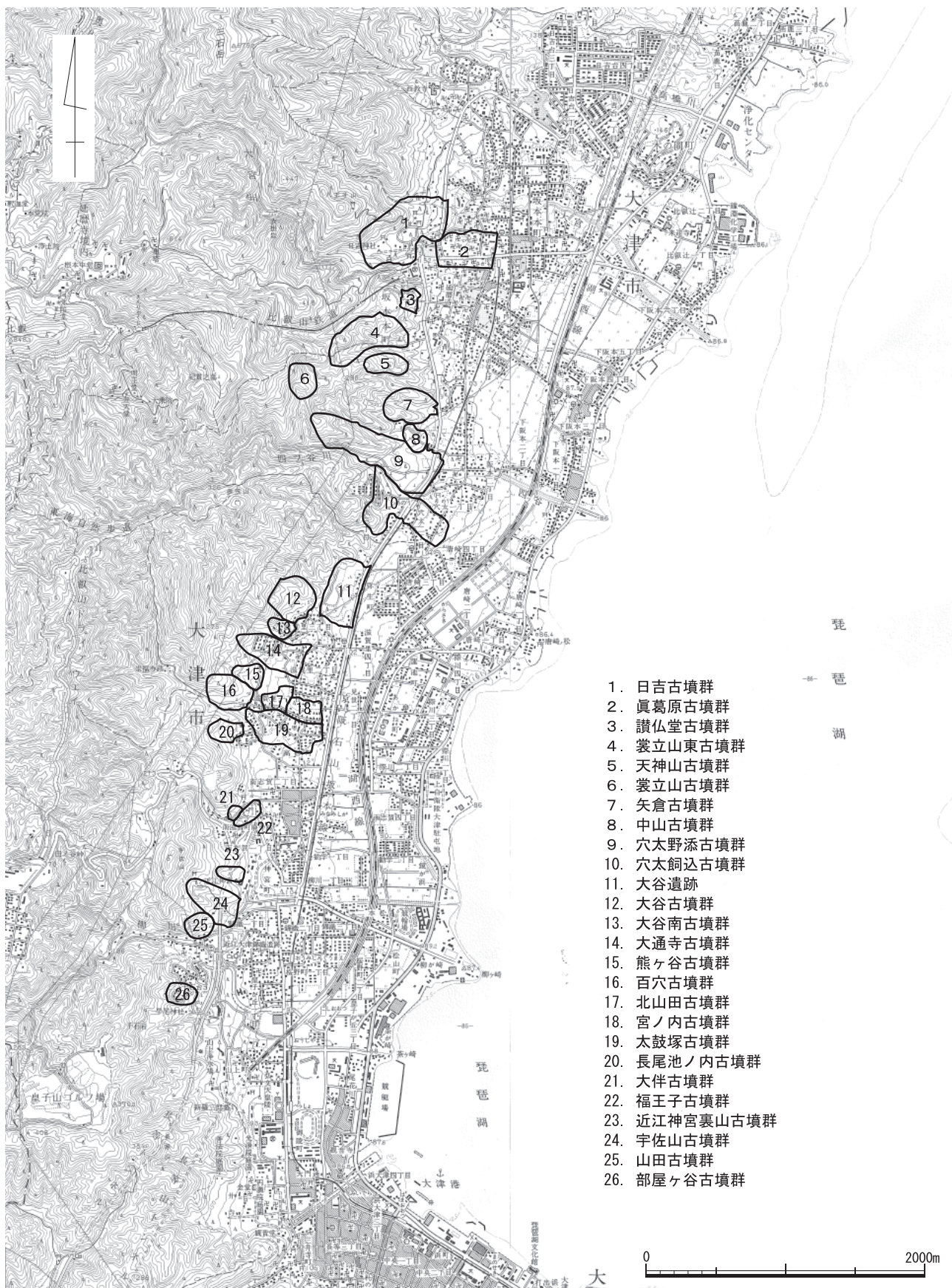


図1 志賀古墳群位置図

特徴であることすでに指摘されていることである。しかし、約 8 割の石室の平面プランが、通有の石室と同じであることは留意しておく必要がある。

石室の袖構造(3)は、発掘調査の有無にかかわらず平面プランが判明している石室を対象とすると、無袖式が約 6%、両袖式が約 34%、右片袖式が約 60%である。左片袖式石室は確認されていない。また、方形・横長形石室は両袖式石室が多い傾向がある。

(2) 先行研究の概要

志賀古墳群の平面プランに注目した先行研究は、花田氏と辻川哲朗氏、森智美氏の研究がある(花田 1998・辻川 2006・森 2007)。

花田研究 花田氏は、平面プランと壁面の持ち送りを基準に、A～D 類の 4 タイプに分類している。A 類は平面プランが縦長長方形を呈する片袖式の横穴式石室で、側壁・奥壁に持ち送りが認められ、天井石が 2～3 石であるもの、B 類は平面プランが方形もしくは横長長方形の両袖式の横穴式石室で、側壁・奥壁ともに急激な持ち送りが認められ、天井石が 1～2 石のもの、C 類は平面プランが縦長長方形を呈する両袖式の横穴式石室で、側壁・奥壁に緩やかな持ち送りが認められ、天井石が 1～2 石のもの、D 類は平面プランが縦長長方形を呈する無袖式の横穴式石室で持ち送りが認められないものとした。

花田氏は、分類した石室の消長と集落の消長の関係、水野氏が指摘している副葬品の特徴と石室分類の関係を検討している。志賀古墳群は A 類・B 類が主体であり、畿内の群集墳と比較して異なる状況であることを明らかにした。そのうえで、集落の在り方を踏まえ、志賀古墳群が渡来人の帰葬によるものと結論付けた。

辻川研究 辻川氏は、穴太飼込古墳群の調査で検出された古墳(穴太飼込 13・20・21 号墳)の石室の時期決定と評価を行うために平面プランの検討を行っている。

遺存状態が比較的良かった上記の 3 基について、同型石室を明らかにした。そして、高麗尺による 6×9 尺(A 規格)、5.5×8 尺(B 規格)の規格があることを指摘した。そのうえで、それらの規格が、志賀古墳群における支群的な位置づけとなる古墳群(4)の複수에認められることから、各古墳群の古墳造営主体を考える手掛かりとなる可能性を指摘している。

森研究 森氏は、志賀古墳群全体を対象として、平面プランの検討を行っている。結果、高麗尺もしくは唐尺の規格が存在すること、尺度に対する精度に差があるものの、共通性を持つことを評価して、平面プランに規格があるとした。さらに、同型石室、相似形石室の存在を見出している。そして、「在地集団と帰葬集団をつなぎ、集団の枠をこえて同族であることを確認し、その意識を強化していた」(森 2007 p396)と結論付けた。

(3) 問題点の抽出と評価

先行研究から、志賀古墳群において尺度の規格が存在した可能性が高い。同型石室が存在していることがそれを裏付けている。しかし、尺度による石室の規格が存在しながら、すべてがグルーピングできるわけではない矛盾もある。規格があるが、それから外れる石室が存在すると評価することもできるが、規格に合わせられなかった＝精度の問題があったとも考えることも可能ではないだろうか。辻川氏・森氏がともに 1/50 の縮尺で重ね合わせて同型石室を抽出している。しかし、この高い精度の同型石室がむしろ特別であると考えられる。石室構築時の予定平面プランと実際の構築後の石室の平面プランでは、差が存在して当然であろう。石室構築の使われる材料は、現代のように規格性のあるブロックのような材料で組み立てられるわけではなく、天然の石材を使用し、サイズも千差万別である。そのため、規格があったとしても幅の中で処理して構築していったと考える。そして現在、みえる遺構(横穴式石室)は、その結果を反映しているのである。

そのように考えると、同型石室が見いだされることは、規格が存在することを意味しており、おそらくは各石室が規格に基づいて構築されていたものと評価すべきである。このように、石室構築の規格が存在し、その規格の中で石室が造られたとするのであるならば、グルーピングできることを前提として作業することが肝要である。

4. 平面プランの具体的な検討

具体的な検討は、先行研究を踏まえながら、①尺度の存在の再確認、②同型石室の検索を行っていく。

(1) 尺度の存在の確認

後期群集墳は、一定の設計尺に基づいて、1 尺単位で秩序づけられているとされている(和田 1992)。その尺度は、高麗尺(約 35 cm)、唐尺(約 30 cm)が候補となる。ここでは先行研究を援用し、高麗尺を使用する。そこで、重要となるのが、確認作業をどの程度の精度とするかである。

志賀古墳群内の石室(玄室)の長さと幅を 10 cm 単位でそれぞれ何基あるかを示したのが図 2 である。この図の中に高麗尺を明示した。そのようにすると数値の山と尺の傾向が概ね一致することがわかる。しかし、この図をみても正確に整数尺に合致するわけではない。前述のような石室構築時の誤差だけではなく、長さ、幅ともに石室の計測する場所で数値が変わること、報告書で報告している数値が現地の実測で確定している例ばかりでないこと、平面プランの基準となる横断面が床面直上ではないこと、計測単位が 10 cm 単位の計測が多いことなど、数値に誤差が生じる原因が複数考えられる。その点を踏まえるならば、「傾向を認める」ことが重要と判断した。よって同型石室の確認は、1/100 の平面図を重ね合わせて判断することとした。

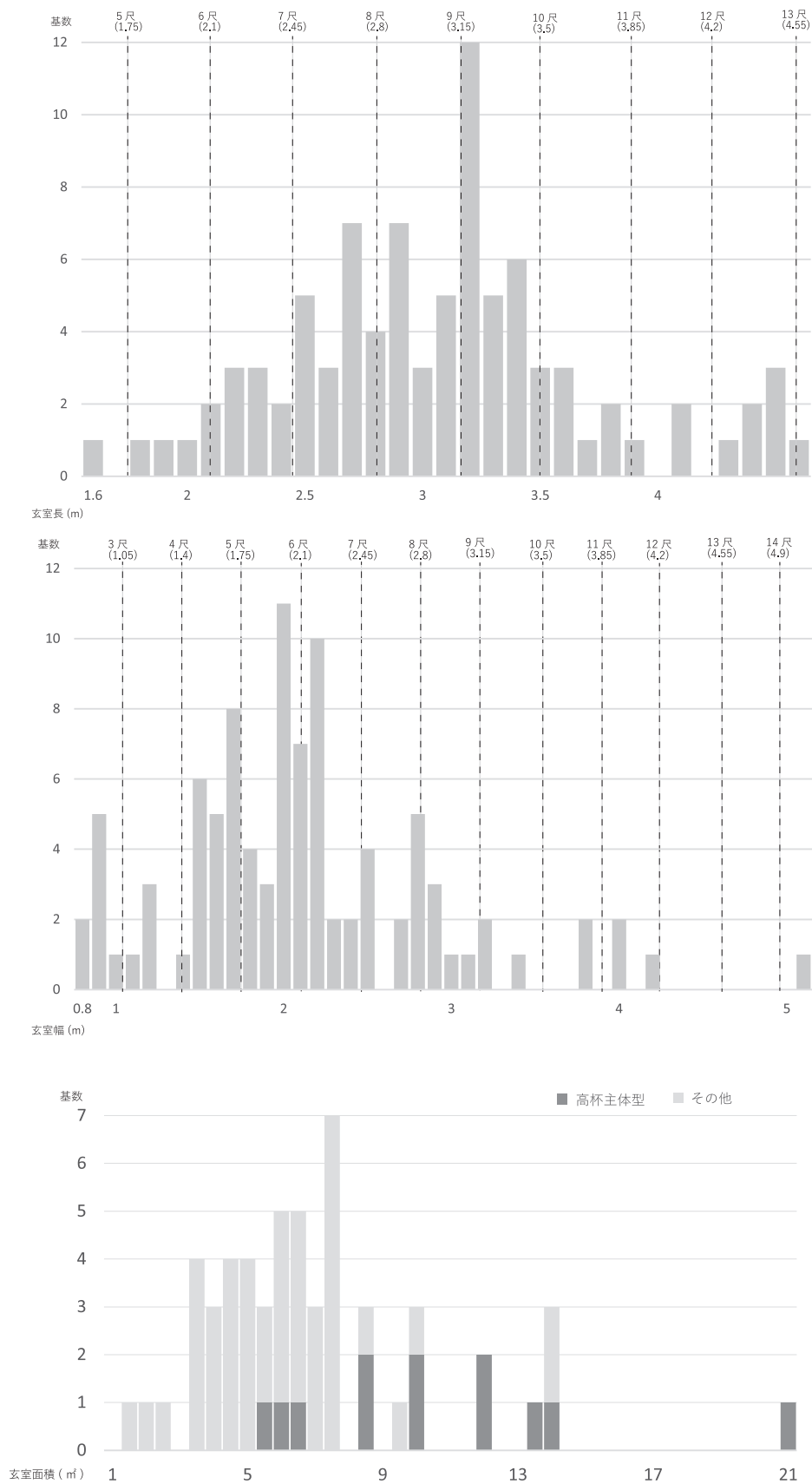


図2 高麗尺と玄室長／幅（上）、玄室面積と高杯主体型（下）

(2) 同型石室の抽出（図5）

平面の規格は、玄室長、幅である。つまり、これが合致する石室は同規格、さらに、これに加え袖部の幅が合致する石室は同型石室とみなせる。同型石室の抽出は、先行研究の成果を生かしながらおこなうこととする。辻川氏、森氏ともに厳密に同型石室を抽出しているの、その抽出石室を手掛かりにある程度の幅を認めながら、類例の石室を追加する手法と採る。また、同型石室は、時期が古いものから新しいものに採用されたと仮定して、最古例の石室を基本タイプ名として明示する。

① 右片袖式石室

【穴太野添1号墳タイプ】

規模 玄室の長さが1.9～2.1m、幅は1.1～1.2m、袖部の幅は0.3mを測る。高麗尺でおおむね6尺×3尺、袖部は1尺に相当する。

同型 穴太野添1号墳、穴太野添2号墳2号石室の2例が確認できる。

時期 VI期で認められる。

【大通寺30号墳タイプ】

規模 玄室の長さは3.1～3.2m、幅は1.5～1.6m、袖部の幅は0.4mを測る。高麗尺でおおむね9尺×5尺、袖幅は1尺に相当する。

同型 大通寺30号墳、太鼓塚18号墳の2例が確認できる。

時期 IV～V期で認められる。

【大通寺32号墳タイプ】

規模 玄室の長さが2.2～2.3m、1.6～1.7m、袖部の幅が0.4mを測る。高麗尺でおおむね6尺×5尺、袖幅は1尺に相当する。

同型 同規格として太鼓塚1号墳、大通寺34号墳をあげることができる。同型石室の可能性があるが、石室の遺存状態が悪いため確定できなかった。

時期 IV～VI期で認められる。

【穴太飼込4号墳タイプ】

規模 玄室長が2.7～2.9m、幅が1.6～1.7m、袖部の幅が1.1mを測る。高麗尺で8尺×4.5尺、袖幅が3尺に相当する。同規格としては大通寺38号墳も含まれるが、袖部の幅が広いため同型石室としなかった。

同型 太鼓塚22号墳、太鼓塚4号墳、穴太飼込10号墳、穴太飼込4号墳の4例が確認できる。

時期 IV～V期で認められる。

【大谷3号墳タイプ】

規模 玄室長は3.1～3.3m、幅は1.9～2.1m、袖部の幅は約1mを測る。高麗尺ではおおむね9尺×6尺、袖幅は3尺に相当する。

同型 大谷1号墳、大谷3号墳、大谷4号墳、穴太飼込6号墳、穴太飼込20号墳、穴太野添北2号墳(5)、穴太野添北3号墳、穴太野添北4号墳、穴太野添北6号墳、大

通寺39号墳、太鼓塚27号墳、太鼓塚29号墳、太鼓塚33号墳、真葛原古墳、福王子18号墳の15例が確認できる。同型石室例が最も多い。

時期 大谷3号墳がI期で、最も新しいと考えられる真葛原古墳がV～VI期とおおむね全時期を通して確認できる。

【福王子16号墳タイプ】

規模 玄室長が2.7～2.9m、幅が1.9～2.1m、袖部の幅が約0.8mを測る。高麗尺でおおむね8尺×6尺、袖幅は2尺に相当する。大谷3号墳タイプより長さが約1尺短い。

同型 福王子1号墳、福王子16号墳、穴太飼込7号墳、穴太飼込21号墳、太鼓塚8号墳、太鼓塚20号墳、太鼓塚23号墳の7例が確認できる。

時期 福王子1号墳、16号墳がIII期で、以降VI期まで認められる。

【大通寺G-1号墳タイプ】

規模 玄室の長さは2.9～3m、幅は2.2～2.3m、袖の幅は0.7～0.8mを測る。高麗尺でおおむね8尺×6尺で、袖幅は2尺に相当する。

同型 太鼓塚16号墳、太鼓塚20号墳、大通寺G-1号墳の3例が確認できる。

時期 V期で認められる。

【大通寺41号墳タイプ】

規模 玄室長が3.5～3.6m、幅が2～2.2m、袖部の幅が0.9mを測る。高麗尺でおおむね11尺×6尺、袖幅は2.5尺に相当する。

同型 大通寺41号墳、穴太遺跡古墳(6)、穴太飼込15号墳、穴太飼込18号墳、太鼓塚15号墳、北山田1号墳の6例が確認できる

時期 I～V期で認められる。

【穴太飼込1号墳タイプ】

規模 玄室長が4.4～4.6m、幅が2.8～2.9m、袖部の幅が1.5mを測る。高麗尺で13尺×8尺、袖幅は4尺に相当する。右袖式石室の中では最も規模が大きい。

同型 穴太飼込1号墳、穴太飼込3号墳の2例が確認できる。

時期 III～IV期で認められる。

② 両袖式石室

【太鼓塚6号墳タイプ】

規模 玄室長が2.5m、幅が2.1～2.2m、袖部の幅0.4～0.55mを測る。高麗尺でおおむね7尺×6尺で、袖幅は1～1.5尺に相当する。

同型 太鼓塚6号墳、穴太飼込13号墳、太鼓塚28号墳の3例が確認できる。

時期 V期で認められる。

【大谷2号墳タイプ】

規模 玄室長が2.5～2.7m、幅が1.7～1.9m、袖部の幅

が0.3～0.4mを測る。高麗尺でおおむね7尺×5尺、袖幅は約1尺に相当する。

同型 大谷2号墳、太鼓塚7号墳の2例が認められる。

時期 時期は詳細が不明であるが、Ⅴ期以降の可能性が高い。

【穴太飼込12号墳タイプ】

規模 玄室長が2.8m、幅は2.2m、袖部の幅は0.3～0.8mを測る。高麗尺でおおむね8尺×6尺で、袖幅は1～1.5尺に相当する。

同型 穴太飼込12号墳、福王子8号墳の2例が確認できる。

時期 Ⅳ～Ⅴ期で認められる。

【太鼓塚26号墳タイプ】

規模 玄室の長さは2.9～3.1m、幅は2.7～2.9m、袖部の幅は0.5～1mを測る。高麗尺でおおむね8尺×8尺で、袖幅は2～3尺に相当する。

同型 太鼓塚12号墳、太鼓塚26号墳の2例が確認できる。

時期 Ⅳ～Ⅴ期で認められる。

【大通寺36号墳タイプ】

規模 玄室長が3.1m、幅は3.8m、袖部の幅は1.1～1.4mを測る。高麗尺でおおむね9尺×11尺、袖幅は3～4尺に相当する。このタイプの石室は、長さより幅が広く、平面形が横長方形を呈する。

同型 大通寺36号墳、大通寺16号墳、太鼓塚30号墳の3例が確認できる。

時期 Ⅳ～Ⅴ期で認められる。

【太鼓塚32号墳タイプ】

規模 玄室長が3.1～3.3m、幅が4～4.2m、袖部の幅が1.2～1.5mを測る。高麗尺でおおむね9尺×12尺、袖幅が3.5～4尺に相当する。

同型 太鼓塚9号墳、太鼓塚32号墳、穴太飼込2号墳の3例が確認できる。

時期 Ⅳ～Ⅴ期で認められる。

【穴太飼込2号墳タイプ】

規模 玄室長が3.1～3.2m、幅は4～4.2m、袖部の幅は1.4mを測る。高麗尺でおおむね9尺×12尺、袖幅は4尺に相当する。このタイプの石室は、長さより幅が広く、平面形が横長方形を呈する。

同型 穴太飼込2号墳、太鼓塚9号墳、太鼓塚32号墳の3例が確認できる。

時期 Ⅳ～Ⅴ期で認められる。

(3) 小結

志賀古墳群において同型石室は、右片袖式石室で8タイプ、両袖式石室で7タイプが確認できた。ただし、袖の型式によって、その内容は大きく異なる。右片袖式石室は、大谷3号墳タイプで14例、福王子16号墳タイプで6例、

大通寺41号墳タイプで6例と、同型石室が4例以上確認されているタイプが複数みられる。それに対して、両袖式石室は最も多い大通寺36号墳タイプ、太鼓塚32号墳タイプの3例が最も多い状況である。

また、石室の平面プランが高麗尺で設計されている可能性が高いことが再確認できた。同型石室において玄室の長さや幅、袖部の幅が、高麗尺を基本として規格がなされていることが読み取れる。

時期は、右片袖式石室の大谷3号墳タイプや大通寺41号墳タイプのように、長期にわたって共有される平面プランがある。一方で、両袖式石室は長期にわたって共有されるタイプが認められず、Ⅳ～Ⅴ期にバリエーションが増える傾向が認められる。これは母数となる基数が、右片袖式石室と両袖式石室では大きく異なることも起因している可能性も考慮しなくてはならないだろう。

そして、すでに指摘されているが、同型石室は各古墳群に跨って確認されていることから、「志賀古墳群」全体に及ぶ規格があったことは明らかである。

5. 平面プランと副葬土器

(1) 副葬土器の内容

志賀古墳群の副葬土器の内容については、

- ① 壺甕主体型、蓋杯主体型、高杯主体型の3タイプが認められること
 - ② 壺甕主体型は時期が新しくなると蓋杯を加えていくこと
 - ③ 蓋杯主体型において、時期が新しくなると蓋杯の量が少→多に変化していくこと
- を明らかにした（堀2019）(7)。

ここでは、副葬土器の内容と同型石室が、どのような関係にあるのかを見ていく。

① 壺甕主体型

大谷3号墳タイプの石室に限定される。Ⅳ期以降は、遺物の出土状況が悪いため、土器の内容・出土位置、時期が限定できない。同型石室はおおむね全期間で認められそうである。Ⅲ期段階に太鼓塚23号墳で壺甕に加え、石室内の地点を変えた蓋杯の複数配置が認められる。これは同じ段階の福王子16号墳タイプの石室である福王子16号墳で同じ状況がみられる。大谷3号墳タイプの石室は、基本単葬(8)で、敷石を敷設しない。

② 蓋杯主体型

大谷3号墳タイプの石室と高杯主体型に分類されない右片袖式石室が属する。大通寺41号墳タイプの石室は、おおむね全時期を通じて確認できる。蓋杯主体型は、大通寺41号墳にみられる蓋杯と壺というセットが特徴である。大通寺41号墳は、蓋杯1セットと壺の最小単位であったが、時期が新しくなるとつれて蓋杯のセット数が増えいく。Ⅳ期段階になると、壺と蓋杯のセットが石室内の地点を違えて配置される例（穴太飼込15号墳）や、高杯+蓋杯と壺+蓋

時期	壺甕主体型	蓋杯主体型	高杯主体型		
I	大谷3号墳タイプ 大谷 4	大通寺41号墳タイプ 大通寺41	○ = 壺甕 ○ = 蓋杯+壺 □ = 蓋杯 ☆ = 高杯+壺 ■ = 木棺 ■ = 敷石		
II	穴太野添北6 穴太野添北6				
III	太鼓塚29 太鼓塚29	太鼓塚33 太鼓塚33	穴太遺跡古墳 穴太遺跡古墳	福王子16号墳タイプ 福王子16	
IV	穴太飼込6 穴太飼込6	太鼓塚4号墳タイプ 太鼓塚4 太鼓塚4	穴太飼込15 穴太飼込15	穴太飼込5 穴太飼込5	
V	真葛原古墳 真葛原古墳	太鼓塚22 太鼓塚22	太鼓塚15 太鼓塚15	太鼓塚23 太鼓塚23	穴太飼込13号墳タイプ 穴太野添13 穴太野添13
VI		穴太野添1号墳タイプ 穴太野添2-2 穴太野添2-2	石棺 太鼓塚8 太鼓塚8	太鼓塚6 太鼓塚6	

図3 同型石室と副葬品配置の変遷1

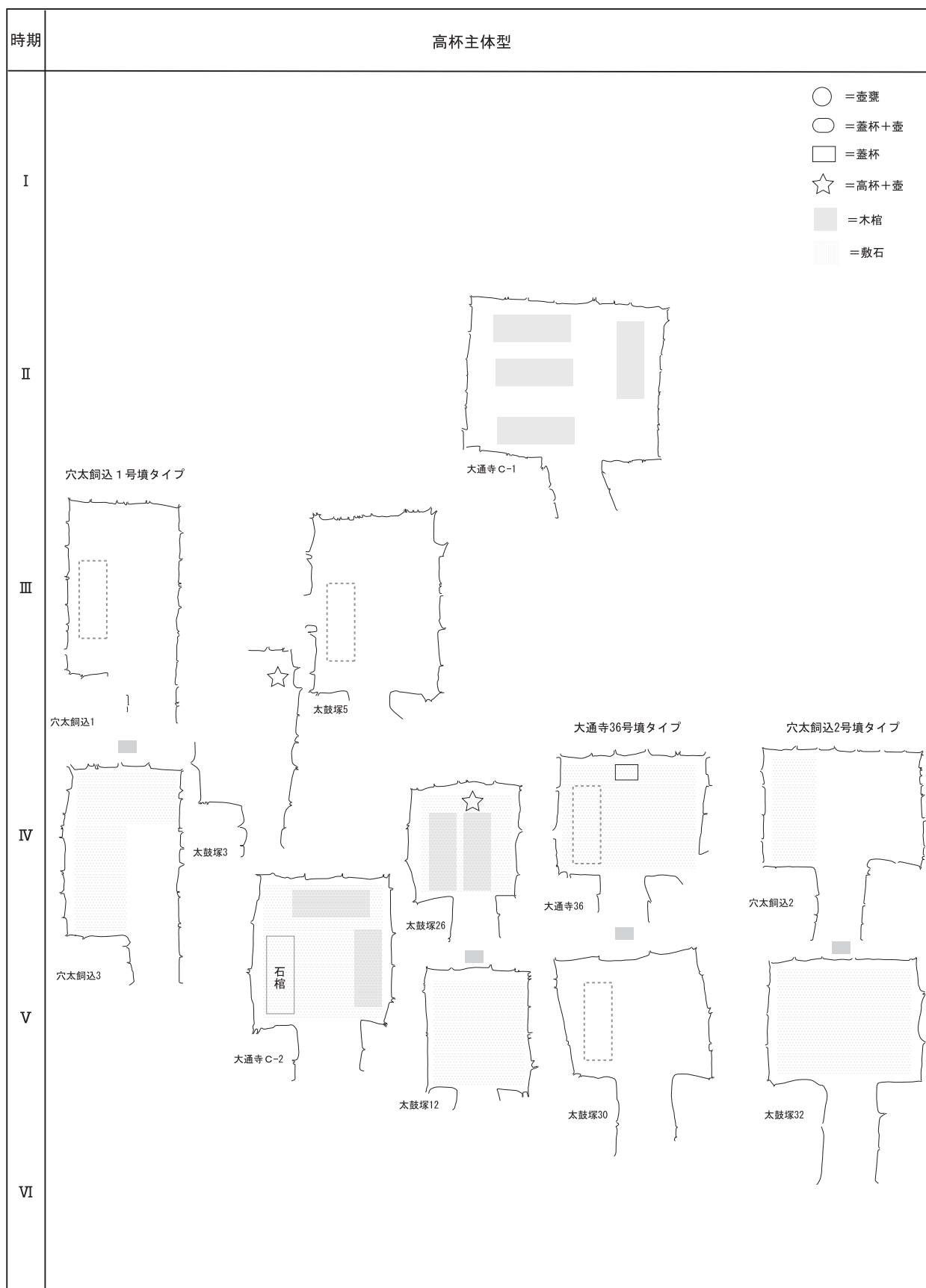


図4 同型石室と副葬品配置の変遷2

杯のセットが1ヶ所ずつ確認できる例（穴太飼込5号墳）がある。Ⅳ期以降は、同型石室のタイプのバリエーションが増えていく。それに伴い、敷石を敷設する石室が出現する。単次葬が基本であるが、Ⅳ期以降に複次葬に変化した可能性がある。

② 高杯主体型

このタイプの副葬土器を選択する石室は、右片袖式石室、両袖式石室の双方で確認できるが、袖の型式にかかわらず大型石室であることが特徴である。出土土器が5点以上確認されている石室に限定すると(9)、玄室の床面積が8㎡以上でこのタイプの副葬土器を採用している比率が高い(図2)。

初現は、Ⅱ期の大通寺C-1号墳である。この古墳は、志賀古墳群の中でも隔離したサイズの石室面積を誇る。4体の遺骸安置が復元されておりその点から、玄室の面積が一定以上の大きさの石室は、複次葬を意味していると考えられるべきかもしれない。そして副葬土器の原位置がわかる例が少ない理由は、複次葬であるがゆえに、人の出入り、副葬品の片付け行為などがあったためかもしれない。また、新しい時期の両袖式石室で床面積が5～6㎡の石室でも、このタイプの副葬土器を採用している古墳がある。石室が小型化していく中で、玄室の床面積が狭いにもかかわらず、高杯主体型の副葬土器を選択しているのは、初現の大通寺C-1号墳が両袖式石室であったことが影響していると考えられる。

(2) 副葬土器の選択

前述のように、副葬土器の選択と平面プランは連動していることが明らかである。玄室内に設置されるものとして遺骸、副葬品があるが、その置き方、量は平面プラン＝スペースに制約を受ける。そのように考えると、壺甕主体型・蓋杯主体型と高杯主体型の副葬土器の違いは、遺骸の数、つまり、単次葬と複次葬の違いも表している。

おそらく複次葬を行う石室として大型石室が築造されるようになったのであろう。そして、複次葬と高杯主体型の副葬土器タイプはセット関係にあったと評価できる。

6. 平面プランと副葬土器

(1) 平面プランと副葬土器の変遷（図5）

志賀古墳群における平面プランと副葬土器の選択の流れを整理する。

Ⅰ期に古墳の築造が開始される。この時期は、壺甕主体型の大谷3号墳タイプ、蓋杯主体型の大通寺41号墳が造られる。この2つの系統は、おおむね全時期を通じて作られる。

Ⅱ期に高杯主体型で両袖式石室である大通寺C-1号墳が造られる。大通寺C-1号墳は、志賀古墳群最大の床面積を誇る。大通寺C-1号墳の登場は、それまで単次葬が主流

であった志賀古墳群に複次葬の導入する契機となる。平面プランにおいても横長方形プランの初現でもある。

Ⅲ期は大型の右片袖式石室の穴太飼込1号墳、大型の両袖式石室の太鼓塚5号墳が造られ、高杯主体型、複次葬が定着していく。その中で大型右片袖式石室である福王子17号墳は高杯主体型ではないが、同時期の他の蓋杯主体型の古墳と比較して多量に蓋杯を副葬している。これは、高杯主体型の影響と理解できる。また、この時期は、副葬土器のタイプ内で変化がみられる。壺甕主体型の大谷3号墳タイプの石室である太鼓塚33号墳で、石室内の別地点に新たに複数の蓋杯を配置する。同様な在り方が、福王子16号墳タイプの石室である福王子16号墳においても確認できる。

Ⅳ期は、両袖式石室の大通寺36号墳タイプ、穴太飼込2号墳タイプが造られる。大通寺C-1号墳の同型石室は確認できないが、上記の両タイプは大通寺C-1号墳の相似形石室(10)である。この段階になると遺骸設置場所に敷石を敷設するようになる。

Ⅴ期は、副葬土器の内容・位置が不明な石室が多い。しかし、敷石の敷設場所の変化が読み取れる。前段階に登場した遺骸の設置場所のみに敷設されていた敷石が、玄室床全面に敷設するようになる。遺骸を置く場所のみであった敷石が、石室全面に敷設することで遺骸を置く場所の制約を受けなくなったと考えられる。これは遺骸の複次葬に対応したものと評価できる。それまで単次葬であった平面タイプにおいて、複次葬が始まった可能性が高い。

Ⅵ期は、石室の小型が著しくなる。この段階では、石室の小型化により単葬とならざるを得なかったと考えられる。

志賀古墳群を平面プランと副葬土器の観点から概観すると、最も大きなインパクトはⅡ期の大通寺C-1号墳の築造である。そのインパクトは次段階以降に、平面プランと副葬土器のバリエーションの増加としてその影響が現れる。

(2) 平面プランと副葬土器の意味

ここで、志賀古墳群における平面プランと副葬土器の意味についてまとめておきたい。

志賀古墳群では、規格に基づいて石室が設計されていた可能性が高いことは、先行研究も含めて指摘されてきたことである。そのうえ、同型石室が存在することは、石室構築においては設計図が存在していたと評価した。そして、副葬土器のタイプの選択と石室平面プランに連動性・限定性があることがわかった。つまり、遺骸の設置場所、副葬土器の種類・場所といった広義の葬送儀礼と石室の空間設計が密接に関係しているのである。

当初は壺甕主体型・蓋杯主体型の2タイプが主流で、それに合わせた平面プランが選択されていた。しかし、大通寺C-1号墳の登場が、古墳群全体に大きな影響を与えることになる。大通寺C-1号墳は、両袖式石室であるだけでは

玄室幅尺 玄室長尺	3	5	6	6,5	7	8
6	VI ○ 穴太野添 1 VI ○ 穴太野添2-2	V 太鼓塚1 VI 大通寺32 IV 大通寺34				
7		VI ○ 太鼓塚18 V ○ 大通寺30				
8		IV ○ 穴太銅込4 V ○ 穴太銅込10 IV ○ 太鼓塚4 V ○ 太鼓塚22 III 大通寺38	III ○ 福王子 1 III ○ 福王子16 ○ 穴太銅込7 V ○ 穴太銅込21 VI ○ 太鼓塚8 V ○ 太鼓塚23	V ○ 太鼓塚20 V ○ 太鼓塚16 IV ○ 大通寺G-1		
9		II 穴太野添北5	IV ○ 穴太銅込6 IV ○ 穴太銅込20 III ○ 穴太野添北2 III ○ 穴太野添北3 III ○ 穴太野添北4 II ○ 穴太野添北6 III ○ 太鼓塚27 III ○ 太鼓塚29 IV ○ 太鼓塚33 ○ 大通寺39 II ○ 大谷1 I ○ 大谷3 I ○ 大谷4 ○ 真葛原		IV 福王子2	
10		IV 穴太銅込5	III ○ 穴太銅込15 III ○ 穴太銅込18 V ○ 太鼓塚15 III ○ 穴太遺跡古墳 I ○ 大通寺41 ○ 北山田1		II 福王子6	IV 太鼓塚24
12					III 福王子17	
13			III 太鼓塚3			IV ○ 穴太銅込1 III ○ 穴太銅込3

○=同型石室

玄室幅尺 玄室長尺	4	4,5	5	6	7	8	9	10	11	12	14,5
6		VI 大通寺35									
6,5	VI 太鼓塚25			VI 太鼓塚11 V 穴太銅込13							
7				V 太鼓塚6 V 太鼓塚28							
7,5			大谷2 太鼓塚7								
8					V 穴太銅込12 III 福王子8	IV 太鼓塚26 V 太鼓塚12	大通寺18				
9							III 嶽		大通寺16 III 大通寺36 V 太鼓塚30	IV 太鼓塚9 V 太鼓塚32 IV 穴太銅込2	
11								V 大通寺C-2			
12											II 大通寺C-1
13							III 太鼓塚 5				

時期		埋葬	石室形態	副葬土器	ミニチュア炊飯具	主な古墳
I	古墳の築造開始	単次葬	右片袖式	壺甕主体型 蓋杯主体型		大谷 1・3・4 大通寺 41
II	大通寺 C-1 号墳築造	複次葬	両袖式	高杯主体型		大通寺 C-1 穴太野添北 6
III	古墳群の規範のアレンジ					穴太銅込 1 太鼓塚 33 太鼓塚 5 穴太遺跡古墳 福王子 16
IV	古墳の増加 規範のパリエーションの増加					穴太銅込 3 穴太銅込 5 太鼓塚 26 大通寺 36
V	規範の消失					太鼓塚 12 太鼓塚 32
VI	石室の縮小化					太鼓塚 8 太鼓塚 6

図5 同型石室一覧（上）・志賀古墳群の形成（下）

なく、複次葬の開始、高杯主体型の導入の画期である。大通寺C-1号墳の登場で、それまで単次葬であった右片袖式石室においても大型石室が登場し、複次葬を導入する。これは、被葬者集団の変化を反映した動向としてみるべきである。それは変化が一時的なものではなく、その後の段階にも影響を残し続けていることが裏付けている。

7. おわりに

渡来人の墓域として著名な志賀古墳群であるが、ミニチュア炊飯具や方形プランで穹隆頂石室（ドーム状石室）の存在に注目されがちである。しかし、ミニチュア炊飯具の副葬は、既調査石室の4割強、方形プランで穹隆頂石室（ドーム状石室）も3割強の石室で確認されているだけである。それは、反対に6割弱のミニチュア炊飯具を副葬しない石室、7割弱の縦長方形の石室が存在していることを意味している。その意味を明らかにすることが、渡来人の存在をより明瞭することができる考えた。それを、平面プラン、副葬土器の共有から読み解く試みが本論となる。

結果、志賀古墳群において平面プランの共有と副葬土器の共有が連動していることが明らかになり、さらに平面プラン・土器副葬タイプの共有は、葬送儀礼を規定している可能性が高いことがわかった(11)。平面プラン・副葬土器タイプを共有する関係性は、各古墳群間を横断していることから、志賀古墳群全体に敷衍していると考えるのが妥当であろう。

本論は、志賀古墳群内の動態に限定して検討を進めた。そのため、各段階でもたらされたインパクトを他地域、他の古墳群と比較した意義づけをしていない。その点について検討が不足している感が否めない。そして、平面プランと副葬土器タイプの共有が葬送儀礼の一環と評価したが、それが具体的に何を意味しているのかは、志賀古墳群以外の事例との比較を通じて、相対化することで明らかになっていくものと考えている。

註

- (1) 石室内に置かれた土器については、被葬者との関係や葬送儀礼の結果等の様々な解釈があり、厳密に評価するべきであるが、本論における「副葬土器」とは石室内に置かれた土器を指す。
- (2) 水野氏は「大津北郊の古墳群」と呼称している（水野 1969）。
- (3) 本論において石室の左右は、奥壁側から玄門をみた場合の左右で統一する。つまり、右片袖とは奥壁から見て右側に袖構造があることを意味している。
- (4) 志賀古墳群は花田氏が提唱したことは前述のとおりである（花田 1993）。そのうえで現在、埋蔵文化財包蔵地として周知されている古墳群の位置づけは（滋賀県 2018）、周知の埋蔵文化財包蔵地である古墳群＝支群（各古墳群と呼称）、志賀古墳群＝周知の埋蔵文化財包蔵地である古墳（古墳群）の集合体として本論では使用する。

- (5) 穴太野添北古墳群は周知の埋蔵文化財包蔵地としては穴太野添古墳群であるが、大津市教育委員会 2017 の調査時に新たな古墳番号を付与しており、区別するために使用する。
- (6) 大津市教育委員会 2016 で報告されている古墳をさす。
- (7) 副葬土器の内容によって以下のように分類した。
壺甕主体型 蓋杯を含まない副葬土器組成
蓋杯主体型 蓋杯を主体とした副葬土器組成、蓋杯＞高杯
高杯主体型 高杯を主体とした副葬土器組成、蓋杯＜高杯
- (8) 単葬は遺骸が1体、単次葬は1回の埋葬行為を指し、遺骸の数は1体とは限らない。複次葬は2回以上の埋葬行為があり、遺骸の数も2体以上を指す。
- (9) 出土している土器の数が少ないと、副葬土器の型に分類することができないため5点を基準とした。
- (10) 相似形石室とは、玄室長、幅、袖幅の比率が同じ石室を指す。
- (11) 副葬土器分類が、壺甕主体型＜蓋杯主体型＜高杯主体型と階層性を反映している可能性に言及したが（堀 2019）、本論の検討を経て、石室の床面積の差は埋葬された遺骸の数を反映していることが明らかになったことから、単純に階層差ではなく、導入の経緯が異なる系譜差などの階層差以外の可能性も考慮する必要がある。

文献（著者名・機関名 50 音順、刊行年順）

- 太田宏明 (2015) 「近畿地方における古墳時代埋葬習俗の変化ー畿内型石室成立期前後を中心としてー」『河上邦彦先生古稀記念献呈論文集』河上邦彦先生古稀記念会
- 太田宏明 (2018) 「日韓の横穴式石室にみられる2つの埋葬習俗」『第15回古代武器研究会発表資料集』
- 大津市歴史博物館 (2016) 『渡来した人々の足跡ー大津の古墳群と集落跡』
- 滋賀県教育委員会 (2018) 『滋賀県遺跡地図』
- 関川尚功 (1988) 「古墳時代の渡来人」『橿原考古学研究所論集』第9
- 関川尚功 (2008) 「横穴式石室における二棺並列葬とその系譜」『橿原考古学研究所論集』第15
- 田中勝弘 (1993) 「近江における横穴式石室の受容と展開」『紀要』第1号 滋賀県立安土城考古博物館
- 田辺昭三 (1981) 『須恵器大成』角川書店
- 田辺昭三 (1996) 『陶邑古窯址群』研究論集第10号 平安学園考古クラブ
- 辻川哲朗 (2006) 「横穴式石室の検討」『穴太飼込古墳群』滋賀県教育委員会・公益財団法人滋賀県文化財保護協会 2006
- 辻川哲朗他 (2007) 「近江の横穴式石室」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
- 辻川哲朗 (2017) 「近江地域のカマド形土器ー渡来系集団の動向把握に向けてー」『紀要』30 公益財団法人滋賀県文化財保護協会
- 寺前直人 (2006) 「ヨモツヘグイ再考ー古墳における飲食と調理の表象としての土器ー」『待兼山論叢』第40号 史学篇
- 土生田純之 (1994) 「畿内型横穴式石室の成立と伝播」『古代王権

と交流』5 名著出版

花田勝広（1993）「渡来人の集落と墓域」『考古学研究』39 巻 4 号
考古学研究会

花田勝広（2002）「河内・大和・近江の渡来人－集住と移動－」『究
班』II 埋蔵文化財研究会

藤村翔（2007）「近江の横穴式石室－窮隆頂持ち送り石室」『近畿
の横穴式石室』横穴式石室研究会

藤村翔（2010）「琵琶湖西南地域における穹隆頂形横穴式石室の展
開と特質」『立命館大学考古学論集』V 立命館大学考古学論集
刊行会

堀真人（2009）「渡来人の墓－志賀古墳群と一須賀古墳群」『紀要』
22 財団法人滋賀県文化財保護協会

堀真人（2012）「横穴式石室の葬送原理を考える－志賀古墳群を中
心に」『龍谷大学考古学論集 II』 龍谷大学考古学論集刊行会

堀真人（2019）「志賀古墳群における葬送儀礼－副葬土器配置の検
討から－」『紀要』32 号 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

堀真人（2020）「「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」以後
－水野論文からみた現在地」『龍谷大学考古学論集 III』 龍谷大
学考古学論集刊行会

水野正好（1969）「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋
賀県文化財調査報告書』第 4 冊 滋賀県教育委員会

森智美（2007）「構築技術からみた湖西南部の横穴式石室」『考古
学論究』小笠原好彦先生退任記念論集

森本徹（2007）「横穴式石室と葬送儀礼」『近畿の横穴式石室』横
穴式石室研究会編

森本徹（2012）「儀礼からみた畿内横穴式石室の特質」『ヒストリ
ア』第 235 号 大阪歴史学会

吉水眞彦（2005）「六・七世紀における近江の渡来文化」『ヤマト
王権と渡来人』サンライズ出版

和田晴吾（1992）「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』第 5 巻
角川書店

※また、本文や図版中で取り上げている古墳は以下の文献を典拠
としている。

【報告書】

大津市教育委員会（1980）『滋賀里・穴太地区遺跡発掘調査報告書
I』大津市文化財調査報告書(12)

大津市教育委員会（1982）『滋賀里・穴太地区遺跡発掘調査報告書
II』大津市文化財調査報告書(5)

大津市教育委員会（1992）『太鼓塚遺跡発掘調査報告書』大津市埋
蔵文化財調査報告書(19)

大津市教育委員会（1992）『北山田遺跡発掘調査報告書』大津市埋
蔵文化財調査報告書 (21)

大津市教育委員会（1993）『埋蔵文化財調査集報 III』大津市埋蔵文
化財調査報告書 (23)

大津市教育委員会（1994）『大谷遺跡発掘調査報告書』大津市埋蔵
文化財調査報告書(25)

大津市教育委員会（2015）『穴太飼込古墳群・穴太遺跡発掘調査報

告書』

大津市教育委員会（2016）『穴太遺跡（下飴屋地区）発掘調査報告
書』

大津市教育委員会（2017）『穴太野添古墳群発掘調査報告書』
滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1982）『大津
市坂本本町嶽古墳調査概要』

滋賀県教育委員会（1969）『滋賀県文化財調査報告書第 4 冊 大
津北郊における古墳群の調査（1）』

滋賀県教育委員会（1987）「大津市南滋賀大伴遺跡発掘調査報告」
『昭和 60 年度滋賀県文化財調査年報』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1981）『檀木
原遺跡発掘調査報告 III』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（1995）『大通
寺古墳群』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2004）「穴太
飼込古墳群」『緊急雇用創出特別対策事業に伴う出土文化財資料
化収納業務報告書 I』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2005）『出土
文化財資料化収納業務報告書 II-2』

滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2006）『穴太
飼込古墳群』

（ほり まさと：総務課 副主幹）

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage
Vol.34 2021.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages